

Title	比例と均衡：ケネー「経済表 範式」についての一試論
Sub Title	On Quesnay's analyse de "Tableau Économique"
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.103, No.1 (2010. 4) ,p.171- 186
JaLC DOI	10.14991/001.20100401-0171
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100401-0171">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100401-0171</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

## 比例と均衡

——ケネー「経済表 範式」についての一試論——

寺 出 道 雄

### (1) はじめに

複数の同時代人が伝えるところによると、フランソワ・ケネーは、しばしば、その父から次のような訓戒を常々与えられたと語ったという。

「徳の神殿は、誉れ、報い、罰、恥という四本の円柱によって支えられている。汝は、そのうち何れを基礎として汝の徳を支えんとするかを考えよ。<sup>(1)</sup>」

——本稿の冒頭でこのエピソードを紹介したのは、ケネーの父の、あるいは、それを受

け継いだであろう、ケネーその人の「徳」の理解を示すためではない。それは、彼の父が、「徳」という概念を、複数のコラム columns, colonnes (円柱) によって支えられた神殿という類比を用いて語ったこと、彼が、その父の表現をしばしば想起していたことを、記憶しておいてもらうためである。

パノフスキーは、ゴシック建築の構造とスコラ哲学の叙述の方法論との同型性を論じた『ゴシック建築とスコラ学』において、形態が意味の象徴となるような、形態と意味との特殊な内的関係を表現するために、「視覚論理 visual logic<sup>(2)</sup>」という概念を提示した。本稿で

(1) Albon (1775/1888) p. 40, p. 89. 以下も参照。Fouchy (1774/1888) p. 18, p. 54.

なお、Mirabeau (1774/1888) では、「経済表」そのものの意義が、「壮麗なる建築物の土台」(p. 9, p. 40) という言葉をまじえて語られている。

(2) Panofsky (1951/1976) p. 58, p. 70–71.

なお、ヨーロッパ的な思考ないしその表出としての著述が、本来「概念の建築的構造」を示すことについての分かりやすい解説として、下記を参照。

加藤周一「夕陽妄語（「随筆についての随筆」）」『朝日新聞』2008年4月24日号（夕刊）。

は、ケネーの「経済表 範式」(以下、「範式」と略すことが多い。)を、その「視覚論理」の実現の一例として再考する。すなわち、本稿では、その論証は未だ十分なものとはいえないであろうが、「範式」の形態ないし構造が含意するものを、当時の新古典主義建築におけるオーダーの形態ないし構造から解き明かそうとするのである。<sup>(3)</sup>

といて、「範式」は、いうまでもなく、経済学的な作品である。したがって、その建築としての形態／構造を知るためには、まず、その経済学的な意味を理解しなければならない。また、「範式」の建築としての形態／構造を知ることには意義があるとすれば、そうすることが、その経済学的な意味を、より生き生きと理解することにつながらなければならない。

そこで、以下、(2)の「「範式」を読む」では、「範式」の経済学的な意味を理解する。その上で、(3)の「「範式」を見る」では、「範式」を建築として解釈することが、経済学的な作品としての理解を、いかにより有効なものにするかを説明するとともに、その建築としての形態／構造について説明する。(4)の「おわりに」では、本稿の結論をごく簡単に再述する。

## (2) 「範式」を読む

1 ケネーの「経済表 範式」(表1・表2を参照)が、僅かの数字と同じく僅かの点線とによって、一国の経済の再生産の構造を表現しようとしたものであることはよく知られている。しかし、その「範式」を提示した「経済表の分析」における、ケネー自身による注解や解説が、何らかの混乱を含んでいることも広く認められている。

本節では、「範式」を経済学的に読むのであるが、以上のような事情から、次項以降では、まず、筆者が改良——と、少なくとも筆者自身は考える——を加えた「範式」(表4を参照)を提示し、その上で、それとの差異を指摘する形で、ケネーの「範式」を読むことにする。

2 年々同一の規模での生産——単純再生産——をおこなっている、繁栄した農業王国を想定しよう。

この王国の経済は、農業製品を生産する農業部門と製造業製品を生産する製造業部門との2つの生産部門からなる。また、その王国の人々は、地主階級——主権者すなわち王と聖俗の貴族——と、生産階級すなわち農業者と、不生産階級すなわち製造業者との3つの階級に分かたれている。

2つの部門における生産は、ともに固定係数

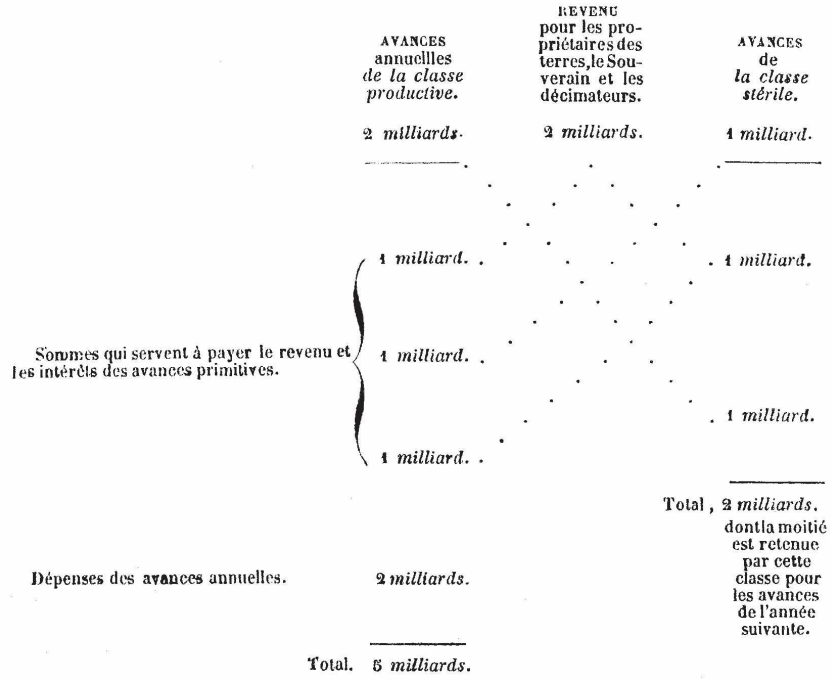
---

(3) このように「経済表 範式」の建築的性格を強調することは、それがハーヴェイ以来の血液循環説の影響を受けたものであることの否定を意味しない。外科医であり瀉血に習熟していたケネーが、そうした影響をこうむらなかったということはあるまいであろう。しかし、本稿では、血液循環の理解と経済循環の理解とを結ぶ方法的な概念が、類比 allegory ないし象徴 symbol であろうことを強調するのみにとどめて、その点には立ち入らない。

表 1

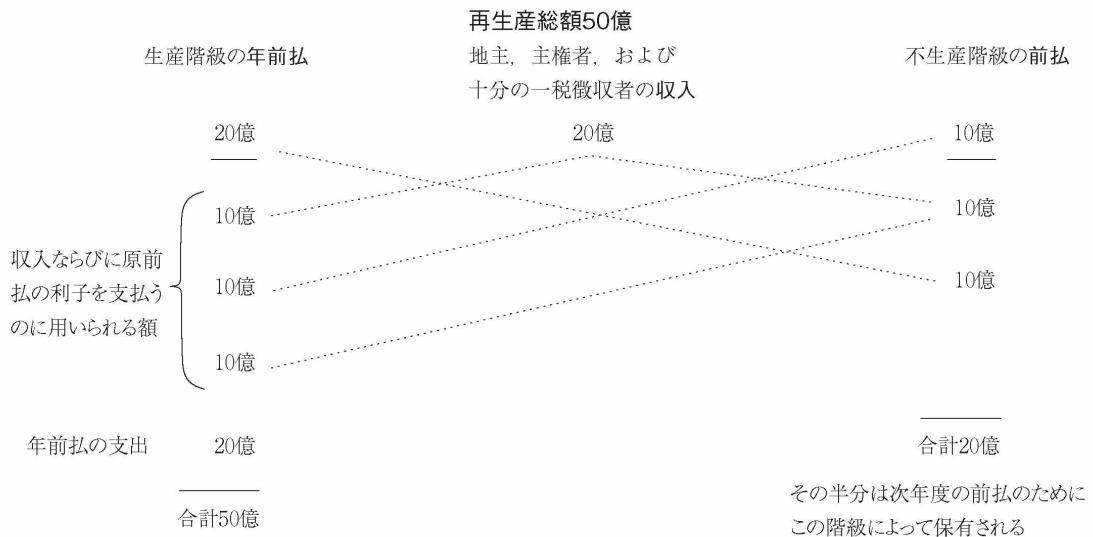
FORMULE DU TABLEAU ÉCONOMIQUE 1.

REPRODUCTION TOTALE : 3 milliards.



出所：Quesnay (1766/1846)

表 2 経済表の範式



出所：平田・井上訳 (1990)

型の生産関数のもとでおこなわれている。すなわち、2つの部門のそれぞれにおいて資本量と産出量との比率、労働量と産出量との比率は所与で一定であり、複数の種類の資本財が生産に用いられるときには、その複数の種類の資本財の結合の比率も所与で一定である。

経済の分配と消費とは、生産階級から地主階級への地代の支払い→市場における3つの階級の人々による消費財および資本財の購買と販売→3つの階級の人々による消費財の消費および資本財の生産のための留保、という順序でおこなわれている。この場合、地代の支払いは、生産の前におこなわれると考えてもよいし、生産の後におこなわれると考えてもよいが、ここでは、ある期の生産→その期の地代の支払いと考えておこう。

そこでは、

1. 地主階級に地代を支払うのは生産階級のみであり、不生産階級から地主階級への支払いは<sup>(4)</sup>ない。
2. 市場においては、自由な取引がおこなわれ、その市場では、地主階級の人々はどんな特権も行使することはできない。
3. 農業製品は、3つの階級の人々すべてによって消費財として消費されるとともに、農業部門、製造業部門の双方で流動資本として機能する資本財として用いられる。
4. 製造業製品は、地主階級の人々によって奢侈的な消費財として消費されるとともに、農業部門では流動資本として

機能する資本財として用いられる。

5. 経済には農業製品、製造業製品という2種類の通常の意味での財の他に、独自の貨幣が存在する。

そして、農業部門を第1部門、製造業部門を第2部門として添え数字で示し、それぞれの部門において流動資本として投下（「年前払」）される農業製品の量を  $A_i$ 、製造業製品の量を  $M_i$  で、それぞれの部門で各人が年1単位の労働を投下するものとして、その労働量に等しい生産者数を  $L_i$  で、それぞれの部門の総生産物量を  $Y_i$  で示すことにする。

また、この王国の経済では、

1. 貨幣の量で表示した農業製品、製造業製品の価格は、それぞれ、 $1$  と  $p$  とであるとする。
2. 貨幣の量で表示した、両部門において等しく、また、それぞれの年消費額に等しい生産者の年所得は  $w$ 、同じく、貨幣の量で表示した、生産階級が地主階級に支払う地代（「収入」）は  $\Pi$  であるとする。
3. 地主は、その地代  $\Pi$  の全部を消費に支出するが、その内、 $1-\beta$  ( $0 < \beta < 1$ ) の部分を農業製品の購入にあて、 $\beta$  の部分を製造業製品の購入にあてるとする。

以上のような事態を表によって示せば、表3のようになる。そして、それを、式で表現すれば、次のようになる。

まず、事態を供給面から見れば、以下の2つの式が成り立つことになる。

---

(4) この想定が重農学派を特質づけることはいうまでもない。

表 3 前払・消費・総生産物

	前払		消費		総生産物	
	農業製品	製造業製品	農業製品	製造業製品	農業製品	製造業製品
生産階級	A <sub>1</sub>	pM <sub>1</sub>	wL <sub>1</sub>		Y <sub>1</sub>	
地主階級			(1 - β)Π	βΠ		
不生産階級	A <sub>2</sub>		wL <sub>2</sub>			pY <sub>2</sub>

$$Y_1 = A_1 + pM_1 + wL_1 + \Pi \quad ①$$

$$pY_2 = A_2 + wL_2 \quad ②$$

①, ②において, 生産者 1 人当たりの年所得  $w$  の水準が制度的に決定されているとすれば, 農業製品の価格が常に 1 であることを前提とした製造業製品の価格  $p$  と農民生産者 1 人当たりの地代は, 一意的に決定される。

また, 事態を需要面から見れば, 以下の 2 つの式が成り立つことになる。

$$Y_1 = A_1 + wL_1 + A_2 + wL_2 + (1 - \beta)\Pi \quad ③$$

$$pY_2 = pM_1 + \beta\Pi \quad ④$$

以上の 4 つの式において, ①の右辺が③の右辺に等しい, あるいは, ②の右辺が④の右辺に等しいとおけば, この経済の単純再生産の均衡条件を求めることができる。

$$pM_1 + \beta\Pi = A_2 + wL_2 \quad ⑤$$

である。この経済の 2 つの生産部門の規模は, ⑤を満たすような比例関係をとっていないければならないのである。そして, そうした比例関係の存在のもとでは, この経済の総生産者人口を所与として, 地代  $\Pi$  の値を含む経済の様相は確定される。また, この経済における

貨幣の流通経路と流通速度とを所与として, 財の順調な流通に必要な貨幣量の値も確定されることになる。

こうした均衡条件が満たされ, 経済が単純再生産の続行を保証されているもとでは, 農業製品の価格 1 と製造業製品の価格  $p (= (A_2 + wL_2)/Y_2)$  とは, そうした再生産の続行の保証の一環となっているのであるから, 「良価 bon prix<sup>(5)</sup>」と呼びうることになる。

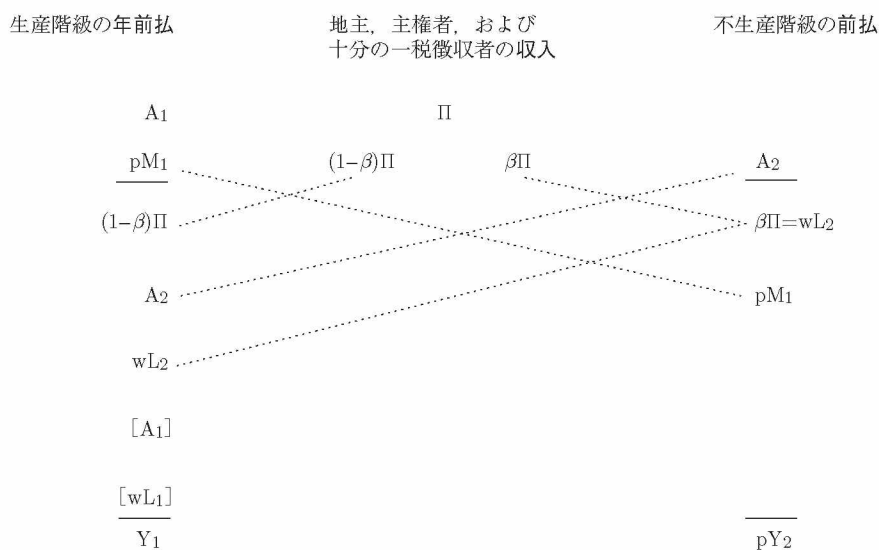
3 以上のような事態を, 「経済表 範式」と同一の形式で表現したものが表 4 である。

なお, 表 4 では, ケネーがしたように, 地主階級による製造業製品の消費額  $\beta\Pi$  と不生産階級による農業製品の消費額  $wL_2$  とが価格において等しいとする前提がおかれている。そうした一般化はできない前提をおかないとすると, 「範式」の表現は表 4 とはやや異なったものになる。しかし, その基本的な考え方は表 4 と同一であるから, そうした一般化の問題については, 本稿ではふれないことにする。

さて, 表 4 の中央の領域の頭部には, 地主階級の収入・支出の総額とその支出の農業製品と製造業製品への振り分けとが示されている。一方, 向かって左の領域と向かって右の領域とは, それぞれ実線によって上下に 3 つ

(5) Quesnay (1766/1888) p. 311, p. 77.

表4 経済表の範式



の領域に区分されている。

それらの頭部、すなわち一番上の領域には、それぞれの部門の年前払が示されている。上から二番目の領域には、それぞれの部門の生産物に対する需要の項目が示されている。その場合、[・]に入っていない項目は、その需要が他部門ないし他階級によるものであり、それらは市場において実現されなければならないことを示している。一方、[・]に入っている項目は、その需要が自部門ないし自階級によるものであり、それらは市場において実現される必要がないものであることを示している。そして上から三番目の領域には、それぞれの部門への需要の合計が示されている。需要と供給とが一致したもとは、それらは供給の合計に等しい。

5本の点線は、それぞれその上端にある部門ないし階級による需要が、その下端にある部門ないし階級による生産物に向けられてい

ることを示している。すなわち、市場における取引の結果として、貨幣はその上端にある部門ないし階級から、その下端にある部門ないし階級に流れ、逆に、通常の意味での財はその下端にある部門ないし階級から、その上端にある部門ないし階級に流れることになる。

そうすると、例えば、この年の市場で同一の貨幣片が2回までは流通しようとして、市場における取引に先立って、地主階級がPiにあたる貨幣を地代の受け取りの結果として所有し、不生産階級がA<sub>2</sub>にあたる貨幣を所有しているとすれば、市場における取引が完了すると、Piにあたる貨幣は、地代の支払い者である生産階級のもとに、A<sub>2</sub>にあたる貨幣は、その元来の所有者である不生産階級のもとに還流していることになる。また、そうした取引によって、3つの階級の人々は、それぞれの消費をまっとうすることになるし、農業部門と製造業部門との双方において、次の年に

その年と同一の規模での生産の開始を保証するような年前払を体現する資本財、それぞれ、 $A_1 \cdot M_1$  と  $A_2$  とが確保されていることにもなる。

その場合、問題の要点は、市場における取引を通じて再生産が続行されるためには、農業部門から製造業部門になされる需要と製造業部門から農業部門になされる需要とが等しくなっていなければならない、ということである。

そうした部門間での取引の均衡を考えるとときには、地主階級から農業部門になされる需要については、実際には市場を通じて実現されるものであるが、農業部門自身からの、市場を通じた実現の必要のない需要であると見做される。一方、市場を通じて、地主階級から製造業部門になされる需要については、農業部門から製造業部門になされる需要であると見做される。地主階級による需要は、すべて農業部門ないし生産階級から受け取った地代によってなされるからである。

以上の2点を考慮すれば、次のようにいえることになる。

生産階級および地主階級から出発して不生産階級に向かって下っていく点線の出発点の項目の和——すなわち、 $pM_1 + \beta\Pi$ ——と不生産階級から出発して生産階級に向かって下っていく点線の出発点の項目の和——すなわち、 $A_2 + wL_2$ ——とが等しくなることが、農業部門から製造業部門になされる需要と製造業部門から農業部門になされる需要とが等しくな

ることを表現する。そして、その成立は、前項で求めた、この王国の経済の単純再生産の均衡条件の成立に他ならない。すなわち、

$$pM_1 + \beta\Pi = A_2 + wL_2 \quad \textcircled{5}$$

の成立である。

「範式」は、以上のことを語っているのである。

4 さて、「経済表 範式」を、以上のように修正を加えて読んだことを前提として、表1・表2にあげたケネー自身の「範式」に含まれていた混乱について、ふれておこう。

問題は、左の領域の上から二番目の領域の下部には、農業部門への需要のうち、自部門・自階級からくる需要の項目を書き込むべきところを、ケネーが、表1・表2に明記されているように、農業部門の年前払の項目を書き込んでしまったことに起因すると思われる。すなわち、 $A_1 \cdot wL_1$  を書き込むべきところに、 $A_1 \cdot pM_1$  を書き込んでしまったことである。

このことの不整合性は、ケネー自身が、左の領域の上から二番目の領域を、「この階級が受け取る額の欄<sup>(6)</sup> colonne」と呼び、実際、左の領域の上から二番目の領域の上部には、農業部門への需要のうち、他部門・他階級からくる需要の項目を書き込んでいることに現われている。また、その不整合性は、左の領域の上から二番目の領域と対応する、右の領域の上から二番目の領域には、製造業部門への需要の項目  $pM_1 \cdot \beta\Pi$  を書き込んでおり、その年前払を体現する生産物の項目  $A_2$  を書き込んではいないことにも現われている。

(6) 同上 p.315, p.81。



ケネーの用いた数値例では、生産階級による農業製品の消費額  $wL_1$  も農業部門における製造業製品による年前払  $pM_1$  も、ともに 10 億リーブルであるとされていることから、そうした混乱が生じたのであろう。

左の領域の上から二番目の領域の上部に、農業部門への需要のうち、他部門・他階級からくる需要 30 億リーブルの内訳を書き込んでいるにもかかわらず、その下部に、農業部門の年前払 20 億リーブルを書き込めば、その左の領域の上から二番目の領域の全体から、年前払にも属さず、他部門・他階級からくる需要の項目にも属さない、生産階級による農業製品の消費 10 億リーブルの存在は消えてしまう。そうすると、農業部門の総生産額 50 億リーブルから、年前払 20 億リーブルを差引いた 30 億リーブルの全体を、そのすべてが地代ないし収入そのものではないにせよ、ケネーのいう「純生産物」——古典派・マルクスのいえば「剰余生産物」——的な性格をもつ存在として解釈する必要が生まれてくる。こうして、「原前払」（固定資本の投下）100 億リーブルの「利子」10 億リーブルという、本来、「範式」の枠組みの中では整合的な説明の不可能な費目と数値とが、「範式」の注解と解説とに導入され、議論の整合性は損なわれてしまうことになるのである。

しかし、ここでは、以上のようなケネーの思い込みにもかかわらず、先に見たように、彼によって、農業王国の経済の単純再生産の均衡条件が正確に抽出されていたことを、改め

て確認しなければならない。生産階級による農業製品の消費 10 億リーブルは、その需要が自部門・自階級からくるものであり、それは市場において実現される必要がないものである。その生産階級の消費 10 億リーブルの存在が消えてしまっても、そのことは、市場において、農業部門から製造業部門になされる需要と製造業部門から農業部門になされる需要とが等しくなるという、この王国の経済の単純再生産の均衡条件を抽出することには影響を及ぼさないからである。

こうして、狭義の図や数値例としては正しいが、言葉によるその注解や解説には混乱を含んだ、「経済表 範式」がもたらされたのである。

5 「範式」を読む本節の最後に、「範式」の表現の基本的な整合性を示すために、マルクスの『資本論』における「単純再生産表式」<sup>(7)</sup>を、「範式」の形式によって書き直したものを、表 5 としてあげておこう。

表の中で、 $C_i$ 、 $V_i$ 、 $S_i$  は、それぞれ、生産財生産部門（第 1 部門）と消費財生産部門（第 2 部門）との、不変資本総額、可変資本総額、剰余価値総額、を表わしている。

「範式」を読んだのと同じ読み方によって、表 5 からは、マルクスの資本主義経済の単純再生産の均衡条件が、

$$V_1 + S_1 = C_2$$

であることが、直ちに読み取れる。<sup>(8)</sup>

(7) Marx (1885/1997) Ch. XX.

表 5 単純再生産表式

生産財生産 部門の前払	剰余価値	消費財生産 部門の前払
C <sub>1</sub>	S	C <sub>2</sub>
V <sub>1</sub>	S <sub>1</sub> , S <sub>2</sub>	V <sub>2</sub>
C <sub>2</sub>		S <sub>1</sub>
[C <sub>1</sub> ]		V <sub>1</sub>
——		[V <sub>2</sub> ]
C <sub>1</sub> +V <sub>1</sub> +S <sub>1</sub>		[S <sub>2</sub> ]
		——
		C <sub>2</sub> +V <sub>2</sub> +S <sub>2</sub>

(3) 「範式」を見る

1 この節では、「経済表 範式」を見ることにする。

「範式」は、図 1-1 に示したように、不規則を含んで、縦・横に 7 つの四角形を組み合わせた形態をとっている。また、それぞれの四角形の中に記載された数値の定義を、端的に紹介しようとするときには、それを、図 1-2 に示したように、それぞれ、生産階級、地主階級、不生産階級について記述した、3 つの列をなした四角形からなる形態として表現することが便利である。ケネー自身、「範式」に記載された数値の定義を紹介するとき、それを「右」「中央」「左」という 3 つの列からなる形

態として表現している。また、本稿でも、そうした紹介のとき、それを「左」「中央」「右」の「領域」という 3 つの列からなる形態として表現した。

しかし、そうした「範式」から、その全体の意味を読み取っていけば、「範式」に記載された個々の数値は、まるでその「全体の意味」という真の形相を分有させられた質料であるかのように、質料と形相とをそなえた、手でふれることのできる「もの」として、図 1-3 に示したような形態／構造を、構成していくのである。

2 「範式」の形態／構造は、ケネー自身が「この階級が受け取る額の列 <sup>(10)</sup> colonne」と呼んだ、(1-1)、(1-2) の 2 つの縦長の長方形と (2) の横長の長方形とを組み合わせたもので

(8) マルクスの「拡大再生産表式」を、ケネーの「範式」の形態で表現することもできる。

(9) Quesnay (1766/1888) p. 315, p. 81.

なお、ケネーは、「範式」について述べるとき、何かの「もの」に対面しているかのように、向かって左を「右 droite」、向かって右を「左 gauche」と表現している。

(10) 前掲注 (6) と同一箇所。

図 1-1

1	2	3
4		5
6		7

図 1-2

	2	
1		3

図 1-3

	2	
1-1		1-2

ある。

(1-1), (1-2) の2つの縦長の長方形は、それぞれ農業部門、製造業部門に対する需要の内訳と合計とを示している。需要の合計は、需要と供給との均衡のもとでは、供給の合計に等しい。一方、(2) の横長の長方形は、単純再生産のための均衡条件が満たされることによって実現される、再生産の続行を保証する条件が示されている。

その場合、農業部門、製造業部門のそれぞれにおいて、年前払が確保されることが、再生産の続行を保証する条件であることはいうまでもない。しかし、同じ横長の長方形に現われる地代の支払い・受け取りもまた、再生産の続行を保証する条件なのである。なぜならば、主権者と聖俗の貴族とからなる地主階級の存在自体が再生産されることは、この王国の市場における自由な競争の維持と所有の秩序の維持とが制度的に保証されるための前提だからである。

ケネーは、農業王国の統治について、次のように述べる。

「経営的富の基本の保全は経済統治の主要目的にならなければならないのである。なぜかといえば、この保全が、主権者および国民の収入の全額を左右するからである。<sup>(11)</sup>」

そうした統治の主要目的の実現のためには、「交易の自由」によって「生産物の販路を良価に……維持」<sup>(12)</sup>するとともに、「耕作に必要な動

(11) Quesnay (1766/1888) p. 309, p. 74.

「経営的富の基本」とは、直接には「原前払」を指すが、この文章は、「年前払」を含む「経営的富」一般について述べたものとしても読める。

(12) 同上 p. 311, p. 77.

産的富の所有権の安全<sup>(13)</sup>を維持することが必要である。そして、その維持の主体となる存在が、直接には主権者すなわち王、広くは聖俗の貴族を合わせた地主階級なのである。

ケネーは、「範式」に登場する農業製品、製造業製品の価格である「恒常的価格 prix constants」について、次のように述べる。

「恒常的価格とは、商業の自由競争と農業の経営的富の所有権に関する完全な保証とがつねに存在する場合に、商業諸国民間に成立しているものである。<sup>(14)</sup>」

こうして、「範式」においては、点線で示された3つの階級間での取引がおこなわれる場である市場は、主権者と聖俗の貴族からなる地主階級の収入の項の直下に、ないしは、農業部門の年前払・地主の収入・製造業部門の年前払、という3つの項からなる1つの行の下におかれることになる。このように考えれば、再生産の続行のための年前払の確保は、市場における自由な競争と所有の秩序の安定との帰結を表現している、と読み取れることにもなるのである。

3 ここで、(1-1)、(1-2)の2つの縦長の長方形と(2)の横長の長方形とを組み合わせた、「経済表 範式」が意味するところを、①～⑤の式を用いて、まとめ直してみよう。

(1-1)の上部には、前節で見た混乱を含みながらも、事実上、

$$Y_1 = A_1 + wL_1 + A_2 + wL_2 + (1 - \beta)\Pi \quad \textcircled{3}$$

が、その下部には、

$$Y_1 = A_1 + pM_1 + wL_1 + \Pi \quad \textcircled{1}$$

が書き込まれている。

(1-2)の上部には、

$$pY_2 = pM_1 + \beta\Pi \quad \textcircled{4}$$

が、その下部には、

$$pY_2 = A_2 + wL_2 \quad \textcircled{2}$$

が書き込まれている。

また、(2)には、経済の再生産の続行を保証する、農業部門、製造業部門の年前払、それぞれ、 $A_1 + pM_1$ 、 $A_2$ が確保されている様相とともに、そうした再生産の続行のための制度的な前提を保証する主体である、主権者を頂点とした地主階級の存在自体の再生産が、地代  $\Pi$  の支払い・受け取りによって確保されている様相が、書き込まれている。

そして、5本の点線の行き来する、一見、空虚に見える空間には、自由な競争と所有の秩序の安定とが制度的に保証されたもとの、①～④に支えられて、

$$pM_1 + \beta\Pi = A_2 + wL_2 \quad \textcircled{5}$$

で示される再生産の均衡条件を成立させるような、この王国の市場が描かれている。

その場合、(1-1)、(1-2)の2つの縦長の長方形に示された、経済の生産と分配の様相と、(2)の横長の長方形に示された、再生産の続行を保証する条件とは、前者が前提であり、後者が帰結であるとともに、後者が前提であ

(13) 同上 p. 319, p. 86。

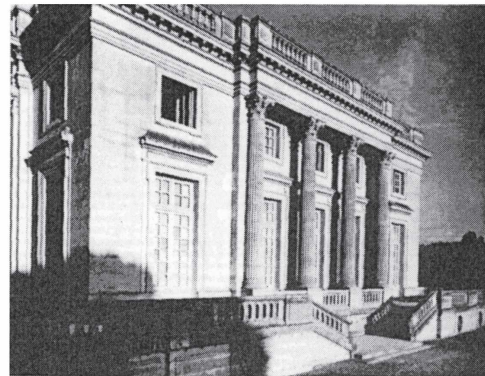
(14) 同上 p. 309, p. 74。

り、前者が帰結である、という関係にある。しかし、そうした前提が帰結となり、帰結が前提となる連鎖の中で、再生産の続行を究極的に基礎づけているのは、農業部門での生産において、土地が年前払を上回る生産物、古典派・マルクスの意味での「純生産物」をもたらすという事実にもとづく、農業部門、製造業部門の双方での生産と分配の過程である。<sup>(15)</sup>したがって、この王国の経済の再生産の様相は、(1-1)、(1-2)の2つの縦長の長方形が、(2)の横長の長方形を支えるという形態によって、象徴的に表現されることになるのである。

4 ケネーが「経済表 範式」を含む「経済表の分析」を公表した1766年の2年前、64年に、彼がその中二階に住むヴェルサイユでは、ガブリエルの設計になる小トリアノンが完工した。ガブリエルについては、アンジェー・ジャックと特定しておかなければならない。代々の建築家の家に生まれた彼は、当時、洗練された建築趣味の持ち主であったルイ15世の宮廷で、首席建築家をつとめていた。

小トリアノンが、ルイ15世の命によって、その愛人でありケネーが侍医をつとめた人でもあったポンパドゥール侯爵夫人のために建設された——その完工の年は侯爵夫人の死の年になるのであるが——ことは、よく知られている。ここでは、その西面の写真を図2としてあげておこう。その中央には、まぎれもないオーダーの様式が取り入れられている。オーダー order とは、複数のコラム columns

図 2



出所：Watkin (1986)

図 3



出所：ロージェ (1986)

(15) 恐らく、この点を正當に認識していたことと地代のみを「純生産物」と定義したこととのズレに、前節で見た、ケネーによる混乱の根底的な原因があったのであろう。

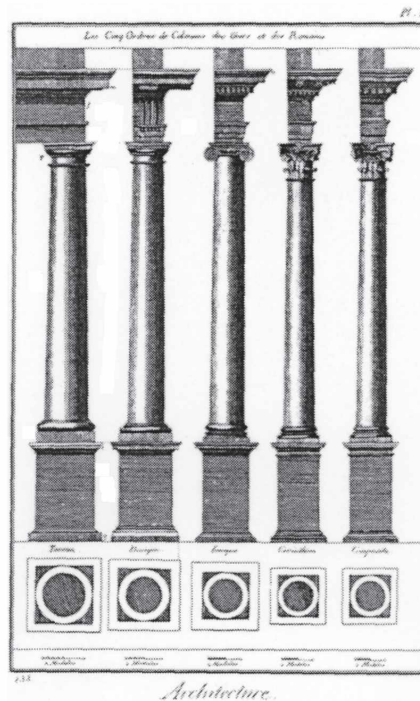
(円柱)が、上部の架構、すなわちエンタブレチュア entablature (桁梁)を支えるような、柱梁構造のことである。

小トリアノンにおけるオーダーの採用は、当時、すなわち 18 世紀後半のフランスの建築思潮を、はっきりと表現するものであった。

18 世紀後半のフランスの建築思潮の状況を一言でいえば、それは新古典主義の興隆の時代にあたった。新古典主義建築とは、西洋建築の原点である古代ギリシャ・ローマの建築を、文字通りに「古典」ないし「典拠」と見做す建築様式であった。そのことは、図 2 の小トリアノンの写真を見れば明らかであろう。また、そのことは、図 3 としてあげた、1753 年に出版された、イエズス会士ロージェの著書、『建築試論』の扉にかかげられた有名な寓意画にも示されている。それは、コラムとエンタブレチュアとペディメント pediment (切妻壁) からなる構造が、建築の元型であることを語っている。

新古典主義建築は、その明瞭な幾何学性にも見られるように、ロココの過剰とは対照的に、合理主義的な精神の産物であった。もちろん、建築に限らず芸術全般に現われた思潮としての新古典主義は、それが 19 世紀のロマン主義の源泉ともなっていたことに示されるように、単調な合理主義にもとづくものではなかった。しかし、それは、たしかに当時の「啓蒙」の重要な一環であった。『百科全書』における建築観も、ヴィニョーラの『建築の五つのオーダー』(1562 年)や後述するウィトルーウィウスの著書を典拠とした、新古典主義にもとづくことされる。

図 4



出所：ブルースト (1985)

5 さて、その新古典主義建築においても重要な要素をなすオーダーとは、先にふれたように、複数のコラムが、エンタブレチュアを支える構造のことである。

すなわち、

オーダー = 複数のコラム + 1 つのエンタブレチュア

という構造として理解できる (図 4)。

それは、ドリア式、イオニア式、コリント式というギリシャで生まれた 3 つの様式に、コンポジット式、トスカナ式というローマにおいて付け加えられた 2 つの様式を合わせた、5 つの様式に集約されていた。第 6 のオーダーを探求する努力は、近代におけるまで続けられたが、何人もが納得する 6 番目のオー



ダーはついに生まれなかったのである。

その場合、注意すべきことは、オーダーが比例にもとづく均衡を表現する形態を追及する努力の産物であったことである。そこにおいては、コラムの長さ（高さ）とその直径、コラム間の距離といった関係について、「美しい」比例関係、そして、それがひとたび確立された後には、強固な規範とされていったことに見られるように、「正しい」比例関係が追求されたのである。

ところで、前1世紀の人であったウィトルーウィウスの『建築書』（『建築十書』）は、18世紀においても強い影響力をもち、建築に関する古典の中の古典であるとされていた。その『建築書』では、建築を構成する抽象的な要素を表わす概念として、6つの概念があげられている。その6つの概念のうちでもっとも重要であると見做されてきたのは、シムメトリア *symmetria* という概念であった。

今日、シムメトリー *symmetry* といえば、何よりも「左右の対称」を意味する。特に、日本における外来語としてのシムメトリーは、もっぱらその意味で用いられている。しかし、欧語において、シムメトリーという語が、左右の対称という意味を強めていったのは、18世紀後半以降のことであったとされる。それまでは、それは、むしろより広く「均衡」という意味で用いられていた。本来、広く均衡という意味をもったシムメトリーという語が、

近代において、均衡の特殊な姿である左右の対称を何よりも意味するようになっていったのである。

ウィトルーウィウス自身は、シムメトリーを次のように定義している。

「シムメトリーとは、建物のそれぞれの要素の比例的な相応関係のことであり、そのいかなる個々の部分もが、その全体としての姿と相互に呼応しあうことである。<sup>(16)</sup>」

シムメトリーの概念は、部分と部分との、また、部分と全体との、比例のとれた均衡ないし比例にもとづく均衡を意味するのである。そして、オーダーは、そうしたシムメトリーの概念ないし理念にもとづく、古代ギリシャ・ローマの建築やそれを「古典」として仰ぐ新古典主義建築の、もっとも重要な構成要素となっていたのである。

6 このように見てくれば、「経済表 範式」の性格は明らかであろう。部分と部分との、また、部分と全体との、比例のとれた均衡ないし比例にもとづく均衡。それは、これまで見てきたように、ある繁栄した農業王国の経済の姿について、ケネーが語ったことと同型的 *isomorphous* なものだったことになる。

「範式」は、ある繁栄した農業王国の経済において、さまざまな経済量が、各部門・各階級の間で比例のとれた均衡を成立させる条件と、そうした均衡が年々に繰り返して実現されるための条件とを、幾何学的あるいは形態

(16) Vitruvius (1999) p. 25, p. 12.

もう1つの重要な概念は、オルディナティオ *ordinatio*、すなわちオーダーリング *ordering* である。それは「建物の個々の要素が、シムメトリーの比例的な規格に適用とともに、個々の要素自体として適切な大きさを保つこと」(同上 p. 24, p. 11) である。

的な形式と算術的あるいは数量的な形式とが巧妙に合体された形式において表現していた。その場合、そこに描かれた繁栄した農業王国とは、もはや深刻な危機が迫っていた現実のフランス王国・ブルボン家の王国ではなかった。それは、農業王国が、その繁栄のために本来とるべき姿の「規範」だったのである。

「範式」の形態／構造は、図1-3のように、(1-1)、(1-2)の2つのコラムと(2)のエンタプレチュアからなるオーダーをなしている。一方、そのコラムとエンタプレチュアとは、数量ないし数値によって構成されている。

古代ギリシャ・ローマ世界の人々は、算術的あるいは数量的にも表現できることがらを、幾何学的あるいは形態的に表現することに長けていた。逆に、近代世界の人々は、幾何学的あるいは形態的にも表現できることがらを、算術的あるいは数量的に表現することに長けている。「経済表 範式」は、すべての事物を数量化・数値化してやまない時代である、近代への移行——古代の文芸の復興に始まった移行——の完了を目前にした、18世紀の後半にまことにふさわしい表現の形式だったことになる。

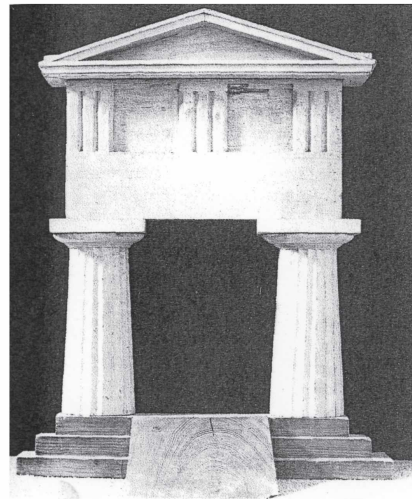
#### (4) おわりに

最後に、本稿での議論の結論を、数値によってではなく、形態によって簡単にまとめておこう。

---

(17) 「造船所の門」は現存しないが、当然、石造であった。しかし、写真にある、その建設のための縮小模型は、写真から素材に「年輪」や「木目」を確認できることからすれば、木造である。

図 5



出所：Watkin (1986)

図5としてあげたのは、フランスの新古典主義建築から強い影響を受けた、スウェーデンの建築家エーレンスヴェルトによる「カルルスクローナ造船所の門の模型」(1785年)の写真である。それは、木で造られた「経済表 範式」<sup>(17)</sup>であった。もちろん、そのようにいうことは、エーレンスヴェルトは「経済表の分析」を読んだことがあるのではないかと、いった愚かな推測をおこなおうとしているのではない。「カルルスクローナ造船所の門の模型」と「経済表 範式」模型という相貌の近似した2つの模型(モデル)には、同一の時代精神が表出されていたのではないかと考えるのである。

(経済学部教授)



### 参 考 文 献\*

#### ケネーの著作と同時代的証言

- Quesnay, F., *Analyse de Tableau Économique*, 1766. 以下に所収。Oncken, A., ed., *Oeuvres Économiques et Philosophiques de F. Quesnay*, Paris, 1888. (平田清明・井上泰夫訳「経済表の分析」『ケネー 経済表』岩波書店, 1990年。)
- Albon, Le Comte d', *Éloge Historique de M. Quesnay*, 1775. 上記 Oncken 編書に所収。(島津亮二・菱山泉訳「ケネー氏に捧ぐる歴史的賛辞」上記『ケネー全集』第1巻, 有斐閣, 1951年。)
- Fouchy, G. J., *Éloge de Quesnay*, 1774. 上記 Oncken 編書に所収。(島津亮二・菱山泉訳「ケネーに捧ぐる弔辞」上記『ケネー全集』第1巻に所収。)
- Mirabeau, Le Marquis de, *Éloge Funèbre de M. François Quesnay*, 1774. 上記 Oncken 編書に所収。(島津亮二・菱山泉訳「フランソワ・ケネーに捧ぐる弔辞」上記『ケネー全集』第1巻に所収。)
- #### ケネー研究と関連文献
- Eltis, W. A., *François Quesnay: A Reinterpretation*. 1. *The Tableau Économique, Oxford Economic Papers*, 27-3, 1975. 以下に所収。Blaug, M., ed., *François Quesnay (1694-1774)*, Vol. I, Aldershot, 1991.
- Marx, K., *Capital*, Vol. II, New York, 1885/1997.

- Panofsky, E., *Gothic Architecture and Scholasticism*, New York, 1951/1976. (前川道郎訳『ゴシック建築とスコラ学』平凡社, 1987年。)
- Philips, A., *The Tableau Économique as a Simple Leontief Model*, *Quarterly Journal of Economics*, 69-1, 1955. 以下に所収。Blaug, M., ed., *François Quesnay (1694-1774)*, Vol. II, Aldershot, 1991.
- Vitruvius, *Ten Books on Architecture*, translated by Rowland, I. D., Cambridge, 1999. (森田慶一訳『ウィトルーウィウス 建築書』東海大学出版会, 1979年。)

#### 写真・絵の引用

- ブルースト, J., 同書編集部編『フランス百科全書絵引』平凡社, 1985年。
- ロージェ, M. A., 三宅理一訳『建築試論』中央公論美術出版, 1986年。
- Watkin, D., *A History of Western Architecture*, London, 1986.

\* Oncken の編書からの引用は表示した和訳によっているが、語を若干変更した。なお、表1の「経済表 範式」は、Daire 版 (Daire, M. E., ed., *Physiocrates*, Paris, 1846.) の複写である。Vitruvius からの引用は、筆者による英訳からの重訳であるが、対応する羅語原典からの森田訳の個所もあげた。なお、文中に「p. X, p. Y」とあるのは、原書ないし英訳書で X ページ、邦訳書で Y ページという意味である。